

筆道資料の探訪

青蓮院流

比叡山は、高野山の靈山に対して学山と呼ばれています。

この両山を中心として発展した天台宗と真言宗は、平安時代の日本を代表する仏教でした。

比叡山は昔から仏教の学問道場といわれた性格を示す例として浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞、日蓮宗の日蓮など、仏教の開祖たちがいずれも比叡山で学ばれています。

わが国の書道にその主流を仏教に発し、延々として不滅の光芒を放ち、公卿・官人等の名筆がこれに加えられました。

定家によつては始められた世尊寺流も鎌倉時代後期には次第に衰え、それに代わる新しい流派が出て来ました。いわゆる尊円親王が初めたもので、青蓮院流（尊円流）と呼ばれるものです。

その尊円親王が後光厳天皇（北朝）に献上した「入木抄」の中で筆についてふれ、次のように述べています。

凡、筆を用いる事料紙による也、折紙には卯毛、只の紙には鹿毛にて候也——大方筆の毛もわろく筆人も又不作

の間、当世は吉筆曾て候はず候なり

と述べています。要するに上質紙には兎毛筆、その他は鹿毛筆でよいが、当世は筆作りの良工、良毛、良筆が少ないと嘆いています。（熊野町史通史編六九〇頁）

青蓮院流は後の御家流の端となつた流派です。

尊円親王は初め行房について世尊寺流を学び、行房の死後は

伊尹を師とし、これに上代の風趣を加えて豊麗な書風をつくりあげたのです。

この青蓮流の出現は当時の書道界に一転機をもたらし、この流派を基とした能書も数多く残っています。

またこの書風に朝廷、幕府における公文書に採用され、ますます盛行をみただのです。

光雲先号如虚空

一切の有礙ニサワリテ

光澤カクモ又モノノナキ

難思議ヲ 歸命言

▲浄土真宗親鸞上人筆蹟